

学校経営推進費 評価報告書（最終）

1. 事業計画の概要

学校名	大阪府立阿武野高等学校
取り組む課題	生徒の学力の充実
評価指標	<ul style="list-style-type: none">・ 難関中堅私立大学への合格生徒数の増加・ 外部学力調査（ベネッセ・進路マップ実力診断テスト）の生徒学力評価指標の向上・ 興味関心、知識技能に係る授業アンケート満足度の向上・ 家庭学習時間の増加・ ICT を活用した授業の増加
計画名	～わかる授業 学ぶ喜び～ 阿武野「学力充実」プロジェクト

2. 事業目標及び本年度の取組み

学校経営計画の 中期的目標	<p>1 確かな学力の育成と授業改善</p> <p>(1) 生徒の参加・活動量の多い「わかる授業」をめざした授業改善に取り組み、自ら学ぶ生徒を育てる。</p> <p>ア アクティブ・ラーニングを取り入れ、生徒の授業参加と活動量を積極的に増加させ、学びを深める。</p> <p>※授業アンケートにおける興味関心、知識技能に係る生徒の満足度（平成 30 年度 79%）を上昇し、令和 3 年度には 87%以上にする。</p>
事業目標	<p>普通教室 16 教室への短焦点プロジェクターの設置、タブレット型端末機の活用により、教材の視覚化、効率化を図るとともに、生徒が自ら参加・活動する「対話型」「発表型」「多方向型」のアクティブラーニングをさらに進展させる。受け身の授業から生徒が主体的、協同的に学ぶ「わかる授業」へと授業の改善を進め、生徒自らが学ぶことへの喜びを実感し、主体的に学習に取り組む力を育成する。</p> <p>これらにより、3年後の難関・中堅私立大学合格者数 30 人以上、興味関心・知識技能に係る授業アンケート満足度 88%以上、ICT を活用した授業 4000 時間以上及び「実力診断テスト」での成績上昇者（Cゾーン以上）の毎年 10%向上、家庭学習時間の毎年 10 分増加を実現する。</p>
整備した 設備・物品	短焦点プロジェクター16台、タブレット型端末機 32 台、無線 LAN 環境一教室
取組みの 主担・実施者	主担者：「あぶのプロジェクトチーム・学力充実プロジェクト委員会」 (教頭・首席・指導教諭・教科主任・情報科教諭) 実施者：全教員の 8 割程度を予定

<p>本年度の 取組内容</p>	<p>「あぶプロ・学力充実プロジェクト委員会」メンバーを中心として、先進校視察や授業力向上のための研修は例年以上に取り組み、伝達研修は昨年の1.5倍の回数を実施した。また、全教科の校内研究授業は持ち方を工夫し、全ての教員が当該学年の研究授業を見学できるように、学年別研究授業日を設定し、時間割等を調整した。3年生は6月、2年生は9月、1年生は1月に実施した。それぞれの学年において、研究授業見学後に授業毎の課題共有・意見交換を行い、その後、全体での教員研修を実施し、より良い授業のポイントを共有化した。同時にこの取組みは新学習指導要領のもとでのあるべきカリキュラム・めざす授業像の論議とも連携し、次年度以降も継続していく。</p>
<p>成果の検証方法 と評価指標</p>	<p>①難関中堅私立大学合格者数：10名以上 ②平均家庭学習時間：昨年度比10分の増加 ③外部学力調査（ベネッセ・進路マップ実力診断テスト）の成績上昇者（Cゾーン以上）の昨年度比10%向上 ④興味関心、知識技能に係る授業アンケート満足度：81%→84% ⑤ICTを活用した授業：3000時間→3500時間</p>
<p>自己評価</p>	<p>学力充実プロジェクト委員会を中心とした取組みが進み、学校組織として、授業改善だけでなく、新学習指導要領のもとでどのような生徒を育てるのか、そのために必要なカリキュラムは何かについて、学びを深める事が出来た。教職員の地道な論議でボトムアップによって確認された生徒像がOECDのキーコンピテンシーと重なり、次年度の取組みに大いに励みとなっている。ただ、多くの項目で成果指標まで到達出来ておらず、相変わらずICTの活用授業の時間数だけは驚異的に伸びている。</p> <p>①難関中堅私立大学合格者数：8名……………（△） ②平均家庭学習時間：昨年度比1分の増加……………（△） ③外部学力調査（ベネッセ・進路マップ実力診断テスト）の成績上昇者：昨年度比13%減……………（△） ④興味関心、知識技能に係る授業アンケート満足度：80%……………（△） ⑤ICTを活用した授業時間数：6653時間……………（○）</p>
<p>事業のまとめ</p>	<p>ICTを活用して授業を行うことは教職員にとって当たり前のことになっている。特に経験年数の多いベテランの教員がここ数年でICTを活用し始めるなど、世代を超えて本校の普遍的な取組みになった。そのうえで、学力充実プロジェクト委員会で論議してきた新学習指導要領に向けてのカリキュラム構築（カリキュラムありきではなく、どんな生徒を育てたいかをベースに論議し、その生徒像を達成するにはどんなカリキュラムが必要かという根本的な論理立てによる構築）をより進め、生徒にとってわかる授業の構築に取り組んでいきたい。今回の推進費による整備がきっかけとなり、より分かりやすい授業とは何かを教職員全員が考えるようになったことは大きな成果である。また、前述したように新学習指導要領の論議を行う必要があるという絶好のタイミングも重なり、ICTの整備が便利なツールが出来たというレベルにとどまらず、そこをきっかけに本質的な論議が出来たことは有意義であった。引き続き、次年度以降もこの事業の成果を継承し、より良い学校づくりに取り組んでいきたい。</p>